

「公園の設計」

井下 清著 日本庭園協会編

雄山閣刊 / 1928年 / 四六判 / 272頁 / 図書番号 OB-0126

井下清は、1905年に東京高等農学校（後の東京農業大学）を卒業後、東京市に入庁し公園課に配属された。1923年に2代目の公園課長に就任。多磨霊園や帝都復興事業の52の東京市立公園を設計した。1946年に定年退職した後は、国土緑化推進委員会常任委員や東京農大の教授などを務めた。

本書は、人々が要求する公園を設計する際に、日本の現状から考えるべき観念と設計の方針を説くもので、著者の20年の実践と研究に由来するものである。

「1 公園の概念」では、公園は専門家の脳裏で自由に設計されるものではなく、国民の習慣や趣味、思想によって造られるべきだとしている。

「2 公園の目的」では、公園は健康や慰安の地であり誰もが自由平等に利用できて、美観形成や衛生状態の改善、防災などの機能を有し、協同生活や大衆道徳を訓練する場であるとする。

「3 公園計画」では、公園個々の設計をする前に、都市、地方、国を通じた公園配置を研究し、各公園が特色を発揮し、補完し合うように計画することが重要だとする。

「4 公園の量と公園組織」では、公園の数量はその地域の人口と面積によりある程度決定されるが、概ね1人あたり1~2坪、市面積の1割を市内4対市外6の比率で配置することが適当であり、多様な特質を持つ公園を各地区に有効に配置して、相互に連携することで一層の効果を発揮できるとしている。

「5 公園設計の基礎」では、公園はその時代の民衆の希望と思想から生まれ、その土地の自然と人文を表現したものであるべきだとする。

「6 様式と地割」では、公園は自然式と建築図案式と施設本意の様式に区分され、実際の造営はこれを適当に統合するのであり、それにより広場や緑地、水面などの地割が決定するという。

「7 公園施設の要素」では、自然味、保健休養、鑑賞娯楽、運動遊戯、利用給與（園内の道路や飲用水栓など）、管理保安、教養という7つの要素について説明している。

「8 設計と経営」では、公園の建設費と管理費は人々の負担によるべきで、採算のない設計は公園の荒廃を招き、風致や風紀を悪化させる原因ともなるとする。

「9 公園の種類と特色」では、都市公園や水辺公園、学校小公園など9種類の公園の特色を述べるが、中でも都市公園こそが密集生活に苦しむ現代人に最も必要な施設であり、市街公園や広大な近郊公園などが適切に配置されることが重要だとする。

「10 公園の施設」では、花壇や音楽堂など21種の施設について解説し、公園施設は公園の地形を活かして設計すべきで、しかも造成の前に決定すべきだとする。

「11 公園の管理施設」では清掃と保安の必要性を、「12 公園建設と世論」では大衆の理解と共同意識の大切さを説いている。

本書における世界の公園など127の写真と挿絵は、公園の多様性と豊かさを表している。本書を読んで、現在の公園に思いを馳せても、古さは全く感じさせない。

（田村靖広・市政専門図書館司書課長兼企画調査室長）